

トランペットで世界目指す

大槌みらい新聞

2012(平成24)年
12月15日(土)

第4号

発行
NewsLab おおつち
電話 0193(55)5908
FAX 020(4662)9611
定価：50円

ジャズのまち復興へ

大槌高校3年で、前吹奏楽部長の臺(だい)隆裕さん(18)は、プロのジャズトランペット奏者を目指し来春、上京する。音楽専門学校で学び、海外留学も視野に入れる。東日本大震災で改めて感じた音楽の魅力。プロとして大成し、ふるさとに帰るつもりだ。

大槌高校3年 臺隆裕さん(18)

トランペットが好きだった訳ではなかった。中学の吹奏楽部入部時、打楽器志望だったが、吹奏楽部の顧問が告げたのはトランペットの担当。吹奏楽部は、2004年から2010年までコンクールで7年連続県大会を突破する実力を持つ。演奏会は、2004年つ。演奏会の準備や曲目選定、観客を楽しませる仕掛けづくりも生徒主体で進行する。「とにかく自由で楽しい。演奏中、勝手にアレンジを加えても、指揮する先生は笑顔になるし、周りの部員もニヤニヤするんですよ。」



両親がプレゼントしてくれたトランペットを吹く臺さん

2年への進級を目前に控えていた時、突然被災者となった。家族は無事だったが、自宅が津波被害を受け、帰る場所が無くなった。約100キロも離れた内陸部へ家族そろって一時避難。盛岡市内の高校への転校を家族で話し合うようになった。落ち着きを取り戻し始めた3月末、「友人たちと、音楽を続けることが必要」と大槌高校に残ることを決め、家族に打ち明けた。反対はされず、両親は5月上旬から大槌に戻る見通しを立ててくれた。

演奏する楽しさ、素晴らしいさを心から感じたの



臺さんと、父・隆明さん、母・裕子さん



希望の灯り城山公園に

兵庫から灯

●**どんな人がやっているの?**
74歳のおばあちゃんから、高校生まで様々な方がレポーターとして活躍しています。

●**町民レポーターとは**
町内の出来事や日常の出来事を伝える大槌町民の方々です!

●**紙面を刷新!**
12月号から町民レポーターの皆さんが書いてくださった記事をより多く掲載できる紙面にしました。

●**町民レポーターの記事が増えました!**

●**紙面を刷新!**
12月号から町民レポーターの皆さんが書いてくださった記事をより多く掲載できる紙面にしました。

医療

病院再建遅れ、増す負担



町が大槌病院の建設予定地の候補にしたふれあい運動公園



津波で2階まで浸水し、現在は解体工事が行われている

移転先は寺野地区に

高齢者の多い大槌町で、暮らしに大きな影響を及ぼすのが医療問題だ。東日本大震災から1年9か月。津波で2階大井まで浸水し、使用不能となった県立大槌病院の再建場所が、大槌町小槌の寺野地区でようやくめぐみが立った。なぜこんなに長引いたのか。今後どうなっていくのだろうか。

検証 復興への道④

多額の通院費用

現在の通院実態を聞くために、小槌第10仮設住宅で暮らす山崎千恵子さん(72)を訪ねてみた。山崎さ

んの通院手段で行ってみようと、仮設診療所から自転車で行ったが、西から吹き下ろす、凍えるような風に、ハンドルを何度も取られそうになり、降りて押すこと3回、自宅まで1時間近くかかった。好天の日でも40分ほどはこぎ通しだ。「冬になるとひどく吹

くのよ、もう自転車はダメね」
山崎さんは糖尿病の治療のため、月1回の検査と、翌週に結果を聞くため病院に通う。自転車では約1時間20分。仮設団地内の友人は皆、行きは家族の出勤時などに乗せてもらい、帰りは約2000円かけタクシーで帰る。無料の路線バスもあるが、通勤時間以降は3時間に1本で、時間が合わないれば待ち続けない仮設診療所まで待つのは難しい。早く治したいと約20キロ離れた釜石市の病院への通院を選んだ人もいる。1回のタクシー代は往復1万円。

15年度完成予定

11月下旬、町役場で町と医療機関の懇談会が開かれた。「これで出ていった町の人も戻ってこられますね」。終了後、碓川豊町長に

参加者が安堵の表情で話しかけた。町がやっと寺野地区での再建を提案したからだった。2015年度に完成する予定だ。大槌病院は現在、大槌町大槌のプレハブ棟で仮設診療所として稼働している。医師数などはほぼ震災前に戻っているが、約60床の入院機能は復旧しないまま、長期の不便を強いることになって

た地域での再建を望んだが、津波など災害に遭わない高台で、十分な広さの場所は地域内になく断念。移転地を探し、1万平方メートルを確保でき、事前の文化財調査など造成に時間がかからない寺野地区の運動公園に絞った。

当初町は、利便性から震災前と同じ町方(まちか

み。碓川町長は「定住環境にとって医療は重要。早期に着手できる場所を選んだ」と強調するが、気の抜けない状況は続く。

把握難しい「心の健康」

病院再建だけでなく、把握の難しい問題もある。町内には震災以前から精神科や心療内科など「心のケア」をする医療機関はない。

援を必要としている人、孤立している人を把握しきれていないという不安がある。

震災による心理的ショックの慢性化や、仮設住宅や職場など生活環境が変わった影響など、精神面の健康はどう支えられているのだろうか。

小槌中村仮設の赤崎幾哉自治会長は「元気がどうかだけ気にかける」と話す。携帯電話などの発達で遠くの親戚や友人と連絡を取れるようになり、催しなどに参加しないことが孤立ではない。参加しやすい工夫をした上で、後はごみ出しや洗濯物干しなど日々の中で様子を見ていく。町も今年初めて、18歳以上の全町民を対象に今この健康調査を実施し

仮設住宅を中心に、孤立を防ぎ健康に暮らせるようにと、催しや相談会は数多く開かれている。主催者から共通して聞くのが「来られる人は大丈夫なんです」。震災後も自宅暮らし「在宅」を含め、本当に支

「自分たちだけでは全部は出来ない。団体やかかりつけ医の先生たちの力も借りながら対応していきたい(町福祉課)。2度目の冬を迎え、本格的な対応が始まりそうだ。(結城かほる)

